二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

小説 竹内けん
挿絵 Hiviki N

第一章　王子様の日常　006
第二章　社交界　032
第三章　女の意地　069
第四章　女王陛下の悪癖　110
第五章　虎児を得る　158
第六章　月下の淫夢　204

登場人物紹介

Characters

シャクティ

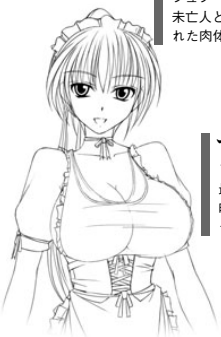
イシュタール王国のクーデターに参加し、最後まで抵抗をし続けた美貌の名将。飄々とした性格で政争を厭う。

ウルスラ

銀色の鎧を纏う、美しき女騎士。騎士団を率いる、王太子フィリックス腹心の部下であり、幼馴染みである最愛の女性。

グロリアーナ

フィリックスの義母にあたる、イシュタール王国の女王。若くして未亡人となってしまったため、熟れた肉体を持てあましている。



マガリ

フィリックスと年齢が近いせいか、最も親しいメイド。仕事熱心で、明るく元気。そのうえ、巨乳でグラマラスな体つきの少女。

フィリックス

元は騎士見習いであったが、数奇な運命に翻弄されイシュタール王国の王太子の座についた少年。

『第二章　社交界』より

「ほら見て、こんなに濡れている」
「くっ……」
凛々しい女騎士は悔しげに顔をそむける。そんなウルスラが横目で見ていることを十分に意識しつつ、フィリックスは首を伸ばし、自らの指先をぺろりと舐めた。
「うん、やっぱりウル姉の蜜って美味しいよ。ほら、ウル姉も舐めてみて」
愛液滴る指先を口元に添えると、ウルスラは至って素直にカプリと咥えてくれた。
（ウル姉ってば、かわいい……。おちんちんしゃぶっているときの顔みたいだ）
まるでフェラチオでもするかのように、自らの愛液に塗れた少年の指をチュウチュウと吸い、爪の狭間を舌先で舐めてきた。
自分の愛液を舐めさせられるなど女にとって屈辱だろう。決して美味しいものでもない。しかし、フィリックスが舐めるように強要したから、嬉々として舐めしゃぶってくれているのだ。
官能に上気した頬で、美味しそうに指をしゃぶるウルスラの横顔を見ていると、自分がいかに愛されているのか、実感できてフィリックスの胸は熱くなる。
指先をしゃぶられているだけなのに、逸物をしゃぶられているような錯覚に陥ったフィリックスは、たまらなくなってウルスラの唇から指を引き抜いた。そして、屈みこむと両手で黒いパンツをズルリと膝下まで引きずりおろす。
「あぁ……ウル姉のすべすべのお尻～」

興奮したフィリックスは、恥も外聞もなく、愛しいお姉さまの尻肉に頬ずりをしてしまう。

硬い弾力のある尻肉は、ひんやりしていて気持ちいい。

「あ、ああ……」

壁に両手をついているウルスラは、恥じらいながらも男が挿入しやすいように、心持ち足を開いて、お尻をさらに突き出してくる。

その無言のおねだりに興奮したフィリックスは、両手でそれぞれの尻朶を掴んで左右に割った。

（うわぁ、ウル姉のドロドロのおま○こから肛門まで丸見えだ。くぅ～ウル姉ってば、澄ました顔していても、身体はイヤらしいんだから）

舌舐めずりをしたフィリックスは、愛しいお姉さまの尻の谷間の始まりにある尾骨にチュッとキスをしてから、きゅっと引き締まった菊華の皺を舌先で味わい、会陰部を這い降りて、陰唇に吸いつくと、ジュルジュルと啜り飲む。

「くっ……おまえはどうしてそんなにスケベなんだ……」

「だって、ウル姉がこんなにエッチな汁いっぱい出してくれるんだもん。飲まないともったいないよ」

フィリックスは鼻の頭を肛門に入れて匂いを嗅ぎながら、蜜壺を啜った。

特に刺激臭はしないが、凛々しいお姉さまの肛門の匂いを嗅いでいるという事実が、興

奮を誘う。夢中になってしょっぱい愛液を貪った。
「あああああっ!?」
ウルスラは身体をガクガクと震わせながら、羞恥の悲鳴をあげて耐えていたが、やがてフィリックスが質問する。
「ねぇ、ウル姉。そろそろおちんちん欲しいんじゃない？」
「そ、そんなことは……おまえが求めるなら、わたしは応じるだけだ……」
そのそっけない答えに、フィリックスは不満を感じる。
「へぇ～そうなんだ。なら、ぼく……ウル姉のおま〇こ。いつまでもこうやってしゃぶっているね」
「くぁあああ……！」
フィリックスは陰核を舌に乗せ捏ね回し、女の船底を隅々まで舐め探り、尿道口を小突き、膣口に吸いつき、会陰を舐め通って、さらに肛門まで舐めあげた。
さらに菊花状に皺の寄る肛門に、先を尖らせた舌を押し込む。
「ば、ばか……や、やめろ。そ、そこは……汚い……」
「大丈夫。ウル姉のアナルだもん。汚くないよ」
ウルスラは必死に自らの肛門を締めて耐えていたようだが、執拗に肛門を舐めほじられているうちに、ついに陥落した。
「わ、わ、わかった。……わ、わたしの……負けだ。おねだりすればいいんだな。おねだ

りを……」

ウルスラの言葉に、フィリックスは肛門穿りをやめた。

凛々しくも美しいお姉さまは、両手を壁に付き、荒い呼吸をしている。心持ち広げた股の間からは、トロトロトロ……蜜が滴り、床には水たまりができていた。

蜜壺がヒクヒクと痙攣している。

ウルスラはお尻に取りついているフィリックスを、熱く潤んだ瞳で見下ろしながらも、口を開いては閉じを繰り返し、幾度か唾を飲んでから、ようやっと声を絞り出した。

「お、おちんちん……ちょうだい……フィリ坊の熱くて、元気なおちんちんを早く入れてくれ。これ以上焦らされては気が狂ってしまう……」

誇り高いお姉さまの精一杯の懇願は、少年の心を鷲掴みした。

ビクンッ！

男根が跳ねあがった。

もう止まらない。立ちあがったフィリックスは、焼き鏝（ごて）のよう熱くなった肉棒を、汁っ気たっぷりのドロドロ陰唇に添える。

「ウル姉がおかしくなったら困るから、すぐに入れてあげる」

お姉さまのくびれた腰を抱きながら、少年はいきり立つ男根を押し込んでいく。

「くっ……」

フィリックスの男根に慣らされ、大好物にしているウルスラの蜜壺は、まるで貪り食べ

るかのように亀頭を飲み込むと、そのまま根本までずっぽりと咥えこんでしまった。
（はぁ～……気持ちいい。ざらざらだし、きつきつだし。ウル姉のオマ〇コってやればやるだけ具合がよくなるよなぁ）
幼いときから憧れ続けていたお姉さまの体内である。ウルスラと肉体関係を持って、まだ三週間あまり。夜伽の当番はルイーズと一日交代で情交だが、じつはこうやって夜伽以外のときにもウルスラと繋がっていることは多い。そして、一日最低三回は精液をたっぷりと注ぎ込んでいるであろう。
しかし、いっこうに飽きなかった。
イシュタール王国の女騎士たちの憧れであり、その厳しい人となりを鬼のように恐れられるウルスラだが、フィリックスの腕の中に包まれているときだけは、女である本性をさらけ出す。心の鎧を脱いでくれる。
（ウル姉はぼくの、ぼくだけのものなんだ）
独占欲と優越感が、少年を高ぶらせ、腰使いは自然と激しくなる。
「バ、バカ……激しすぎる。そんなにされたら……あぁ」
パンッパンッパンッパンッと少年の腰が、女性の尻に当たり、拍手音をたてる。
たまらないといったようすで、ウルスラは仰け反り、男女の結合部からは、グチュグチュグチュグチュと淫らな水音がして、ポタポタポタポタ……と熱い牝汁が止めどなく滴り落ちる。

「こ、声が出ちゃう……」
「出してよ。ぼくウル姉のエッチな声聞きたい」
容赦のない背後攻撃を受けて、無双の女騎士が悶絶する。
「ば、馬鹿、こ、こんなところで出せるか……。ひぃ、そとには、まだひと、が残っているかも、はぐっ……しれないんだぞ」
「なら、出さずにいられないようにしてあげる」
フィリックスは左手でウルスラの乳房を弄びながら、右手を下腹部に這わせていき。二人の結合部をまさぐった。
「はぁぁぁ……そ、そこは……ダメ……あああん……」
陰核を捕らえたのだ。それも包皮を剥いて、剥き出しの女芽をグリグリと回されたウルスラは、涎を吹いて悶絶した。
じゅぷじゅぷじゅぷぷぷ……。
熱い液体をシャワーのように肉棒に浴びせられた。そのうえ蜜壺全体がキュンッキュンッキュンッと心地よく締まって、肉棒全体を揉みしだいた。
「はぅ……まったく、こんなことばかり上手くなって……あ、ああ……あん」
「くっ……だってウル姉は、ぼくの女でしょ。自分の女には思いっきり楽しんでもらいたいじゃない」
陰核責めは両刃の剣となってしまった。蛸壺もかくやといった勢いで吸い立てられて、

睾丸から溢れ出した精液が、肉棒の先端まで詰まってしまう。
しかし、フィリックスは必死に我慢しながら、腰をガンガンと叩きこんだ。
「はぁんっ、はぁんっ、はぁんっ……」
日常生活では、王太子と親衛隊長としての枠を越え、姉と弟のようにふるまうことの多い二人だが、ことセックスの最中だけは力関係は逆転する。
年上の女としての威厳など消し飛んで、若い男に貪るように犯され、最後はヒイヒイ鳴く牝に堕されてしまうが常だ。
もっとも、そうやって好き勝手にさせてもらっているところが、年上の恋人に甘え放題に甘えさせてもらっている、と言えるのかもしれない。
「は、早く……きてぇぇぇ……も、もう……だめ……わたしも……イきそう……」
壁についた両手がずるずると滑り、上体がどんどん沈んでいく。
（あ、ウル姉ってば、もう限界みたいだ……）
膣壁がヒクヒクヒクヒクとすさまじい痙攣をしているのはもちろん、背中全体がガクガクと痙攣している。それは女体がすでに絶頂を極めようとしている証であろう。ただ男と一緒にイきたい、と必死に我慢してくれているのだ。
（ウル姉ってば、かわいいっ！）
幼いときからの憧れのお姉さま。愛情と独占欲がフィリックスの全身を駆け抜ける。
男根がブルブルブルっと痙攣し、その動きに女壺も連動した。

『第三章　女の意地』より

おそらく本日、こんなことになるとは夢にも思わず油断していたのだろう。フィリックスのまえで下着をさらす女たちは、勝負下着をつけているのが常だ。しかるに、これは日常で着用する生下着といったところだろう。

（綺麗な下着もいいけど、こういう下着も生々しくていいかも……それにすごい濡れてる。マガリも興奮していたんだ……）

厚地で野暮ったい下着の上からもわかる。股ぐり部分がしとどに濡れて、中身をうっすらと透けさせていた。

大好きな男の子と長時間密着。そのうえゴリゴリに硬くなっていたものを、お尻に押しつけられていたのだ。マガリとしても、たまらなかったことだろう。

ゴクリッ。

女の高ぶりを察したフィリックスは、生唾を飲むと、女の最後の砦に指をかけた。そして、引き下ろす。

ヌラーッと銀色の糸が引いた。ムンッとするほどの甘酸っぱい牝の性臭が、顔面に浴びせられる。発情少年は思わず鼻腔から肺いっぱいに思いっきり吸ってしまった。

「そ、そんなところの匂い嗅ぐなんてぇ……」

恥じ入ったマガリは、逸物から顔をあげてあわててお尻を隠そうとするが、フィリックスは許さない。

「だって、マガリのオマ〇コ、すっごいいい匂いがするよ。美味しそうだ」

動物的な牝の匂いが牡の性欲を否応なく増進する。
舌舐めずりをした少年は、逃げようとする桃尻を掴んで陰部をじっくりと観察した。
（肉丘がぷっくらしている。マガリってばおっぱいが大きいだけでなくて、こんなところまで大きいんだ。なんか割れ目に吸い込まれそう……）
土手高で柔らかそうな恥丘。いわゆるモリマンだ。
そこに濡れた赤い陰毛が張りついているさまがたまらなく卑猥に見える。
もはや我慢ならなくなったフィリックスは、ショーツを脱がす手間さえも惜しく、太腿の半ばまで下ろしただけで、頭を突っ込んでしまった。
「あ、いきなり……そ、そんな……くあぁ……!?」
恥辱の悲鳴など聞き流し、後頭部のショーツを枕にするようにして、ぴったりと閉じている女陰唇から中身をジュルジュルと吸いだす。
（はぁ～、これがマガリの味なんだ。粘度が高くて濃縮した果実ジュースみたいだ）
口内に広がる、苦くてしょっぱい牝汁の味をフィリックスは堪能した。
「はうぅぅ……！」
いわゆる女上位のシックスナインになったわけだが、性に慣れてない少女はたまらず、両手で逸物をしっかりと握りしめたまま、むっちりした身体を仰け反らせて、ビクンビクンと痙攣させた。
そして、フィリックスの吸いつきが終わったところで、涙ながらに訴える。

「わ、わたしが治療しているんですから、そんなことしなくていいですぅ」
「やだ。ぼくだってマガリのオマ〇コ食べたい」
フィリックスの宣言に、恋する乙女はぶるぶると震える。
「わ、わたしのおま〇こ食べたいって。……そんな、フィリックスくんなら、その……いくらでも食べていいけど、でも、その……今日、わたし、いっぱい汗かいちゃったし、その汚いから」
王太子付きの侍女たるもの、いつ身体を求められてもいいように、常に油断なく身体の手入れをしている。しかし、今日だけはシャワーすら浴びていないのだ。
恥じらう乙女の心理になど頓着せず、餓えた性獣となった少年は陰唇の左右に親指をあてがうと、左右にガバッと開いた。
「はぅ……」
マガリは声にならない悲鳴をあげた。
艶やかなピンク色のお肉が、ひくひくと恥じらうように蠢動しているさまが生々しい。
先に一度吸い取った愛液が、再び溢れ返ってきた。
(ああ、これがマガリのおま〇こなんだ……)
いままで年上の女性の生殖器しか見たことのなかったフィリックスは、初めて見た同世代の少女の生殖器をまえに生唾を飲んだ。
年齢的な違いかもしれないが、女性の性器には、かなり個人差があるようだ、と悟った

フィリックスは、隅々まで見たいと思い、ピンクの媚肉を左右に展翅して、中身をじっくりと観察する。

包皮に包まれた陰核。ポツッした尿道口。ひくひくと収縮している膣口。そして、肛門まで視姦する。

「そ、そんなに見ないでください……」

「どうして、マガリのここ、すごい綺麗だよ。それにすっごい美味しそうなんだ……」

それは新鮮な赤貝でもあるかのようで、一飲みにしてしまいたい誘惑にかられる。

淫らなムチムチボディをしているわりには、ひそかに清純派のマガリは、少年の不躾すぎる視姦を受けて、恥じらいのあまり、顔を真っ赤にするだけではとどまらず、涙まで流してしまっている。

しかし、大好きな男の子に、ようやく身体を求められたのだ。恥じらい震えながらも、決して逃げようとはしなかった。

そんな女心の複雑さを推し量る余裕もなく、フィリックスの決壊した性欲の暴走は、濁流のように氾濫する。

（そういえば、マガリって処女なんだよな。処女膜って見えるのかな？）

純粋な好奇心だ。じつはウルスラとルイーズの処女ももらっているフィリックスだが、あのころは余裕がなくて、そんなものを確認している余裕はなかった。

少年は、少女の蜜壺の四方に人差し指と中指を添えると、ぐいっと広げ覗き込んでみる。

「はぅ……そ、そんな……そんな奥まで見られるなんて……は、恥ずかしすぎますぅ……はぁ……はぁ……」
処女穴を広げられたマガリは、羞恥のあまりいまにも失神しそうだった。
（あの白っぽいのが噂の処女膜なのかな……よくわからないや……）
王子様が、侍女の恥ずかしい穴を遠慮なく観察していると、その最奥からドプッと愛液が溢れた。
熱い雫がタラタラタラ……と少年の顔に降り注ぐ。
フィリックスは、顔にかかった熱い舌を出してペロリっと舐める。
「まったく、マガリったら、かわいい顔してなんてエッチな身体をしているんだ。おっぱいは大きいし、おま〇こからこんなに熱い汁をいっぱい出すだなんて……。もう食べたくなっちゃうじゃないかっ！」
牡を誘う美味しそうな匂いと見た目。そして、牝汁のスープを味わったときフィリックスのほとんど切れかかっていた理性がぶち切れたのを感じた。
剥き出しになっている粘膜に舌先を突っ込むと、柔襞穴をグリグリグリと掻き混ぜる。
「ひぃ、ひぁ……はぁ……あぁん……あん……ああ、食べて、食べてください。わ、わたしの身体はフィリックスくんのものだから、す、好きなだけ、食べちゃってください……ああっ♪」

処女膜を舌先で舐め破られそうな勢いで、穿りあげられたマガリは、女としての被虐感に酔いしれているようだ。

両手には逸物をしっかりと握りしめているが、もはや口でご奉仕を再開できる状態ではない。健康的な口唇を大きく開いて、涎を噴きながら喘ぐばかりである。

（うわぁ……マガリってばかわいい顔して、こんないやらしい声出しちゃう娘だったんだ。か、かわいい……かわいいよマガリ……）

同じ年の少女を弄び快感に目覚めたフィリックスは、むっちりとした尻肉を両手で割り、ヒクヒク痙攣している肛門を観察しながら、舌を動かし続けた。

「ひぃや……あん……、す、すごい……ああんっ！　あぁんっ！」

ムチムチボディの少女は、涙を流しながら嬌声を張り上げており、このまま身も世もなく絶頂してしまうかに思われた。

しかし、そこはご奉仕するものとしての、プライドのようなものが働いたのだろうか。

一方的に悶絶しているかに見えたマガリは、急いで王宮メイド服のブラウスのボタンを外し、ブラジャーを脱いだ。

ぽろりと年齢のわりにはかなり大きな双乳があらわとなる。

ウルスラに匹敵する巨乳だ。年齢が十歳近く離れていることを思えば、驚異的な大きさと言っていいだろう。

根本から太い、肉まん型のおっぱい。

マガリはこの巨大な乳房を左右から掴むと、いきり立つ逸物を挟みこんだ。
「っ⁉」
喘ぎながら口戯奉仕をすることは難しいが、乳戯奉仕ながら喘ぎながらもできる。
「あ、熱い。はぁ……フィリックス……くんの、おちんちん、はふ、こんな、熱かったんだ……ああ♪」
フィリックスがいままで体験してきた女、ルイーズ、ウルスラ、グロリアーナ。いずれも巨乳美女たちだ。もちろん、パイ擦り奉仕もやってもらったことがある。
しかし、彼女たちの乳房よりも、マガリの乳房のほうが弾力に富んだ。若さ弾ける肌はプリップリッだった。
(ほっかほかだ。マガリのおっぱいって見た目通り、肉まんおっぱいだ。柔らかくて、暖かくて気持ちいい。おちんちん埋もれて蕩ける。……あのおっぱいの中には美味しい肉汁がいっぱい詰まっているに違いない)
興奮を隠しきれないフィリックスは、とりあえずマガリの股間から溢れる肉汁をジュルジュルと啜り飲んだ。
「うあんっ！　おちんちんがビックンビクンッて、はぁ、フィリックスくんいやらしいです。はぅ～♪　普段は紳士なのに、エッチの最中だけ、なんでこんなにスケベになっちゃうんですかぁ♪」
悶絶しながらパイ擦り奉仕をするマガリは、涎噴く口唇を大きく開き、胸の谷間から飛

び出した亀頭部の鈴口を、涎滴る舌先で舐めほじった。
「はっくぅ……」
テクニックという意味ではまだまだ拙いが、それを補ってあまりある愛が篭ったご奉仕に、男根から全身が震えた。
（で、出そう……。で、でも、まずマガリにイってもらいたい）
フィリックスが、いままで関係してきた女性は、ウルスラ、ルイーズ、グロリアーナとみんな年上である。そんな中マガリは初めての同じ年の女の子だ。男として見栄を張りたかった。
そこでお姉さまたちの肉体から学んだテクニックを駆使してみることにする。
舌先を蜜壺に思いっきり入れた状態で、右手の親指を会陰部にあてがいモミモミと揉み、左手の親指を陰核に当てて包皮の上から捏ねまわす。
「ひぃ……ひぁぁあああ!!!」
ビクビクビクビク……。
マガリの四肢が痙攣した。
（これでどうだ。ウル姉だって、ルイーズだって、この三か所を同時に責めてあげると、すぐにイっちゃうぞ）
フィリックスは処女壺に入れた舌先を浅く出し入れした。そのぶん、素早い動きにする。
「はが、ああ、ああ、あああ、ああああん……いやぁぁぁぁぁ……」

フィリックスの三点責めは、どうやら期待通りの成果をあげたらしい。爆発寸前の逸物をぷりぷりおっぱいに挟んだ少女は、あたり憚らず牝獣の雄叫びをあげた。

しかし、その淫声が否応なく、牡を追い詰める。

(うわ、マガリってば声大きい。かわいい顔して、なんて淫らな声を出すんだ。……エッチすぎる。こんなエッチな声を聞いていたら、で、でちゃうよ……)

逸物がドクンドクンと脈打ち、射精動作に入った。

いまにも暴発しそうな逸物を気力で抑え込み、夢中になって会陰部を揉み、陰核を捏ね、蜜壺を穿った。そして、ついにマガリは昇天する。

「ひ、ひぃ……ああ、も、もうッ……ダメ、ダメ、ダメです……あああああ!!!」

蜜壺に入れていた舌が、キュンキュンキュンと締められる。

健康的な女体が、プルプルと痙攣したと思ったら、牝の狭間から、ブシャッと潮が吹いた。

(やったっ。マガリをイかした……)

達成感の中、温かい雫を顔面に浴びたフィリックスもまた、牡としての満足感に浸りながら果てた。

ドビュッ、ドビュドビュドビュ……!!!

大きく喘いでいたマガリは逸物から口を離してしまっており、噴き出す白濁液は、赤毛の前髪、小さな額、鼻の頭、大きな目、柔らかな頬、ぷっくりとした唇。そして、嬌声を

『第六章　月下の淫夢』より

そんななんとも気まずい沈黙の中、進み出た女がいる。
「は～い。わたし王子さまのおちんちん欲しいです。だから恥ずかしいオナニー姿も見せちゃいま～す♪」
栗色の長髪に、色白で色素の薄い肌。ほっそりとした柳のような身体なのに、胸はなかなか大きい。万人が認めるだろう美人だが、よく見るとどこかネジが一本足りないようなゆるんだ表情をしているお姫様だった。
（げぇ、サーシャさんがいたんだった……）
森林貴族の娘にして、王太子付きの侍女の中でルイーズに次ぐ年長。日常生活でも、虎視眈々とフィリックスを誘惑しまくる最危険お姉さまだ。
彼女なら、こういう破廉恥なことも遊び感覚で平気でやるだろう。
「わたしぃ～王子様のこと思って、毎晩オナニーしている、すっごい淫らな女なんですぅ♪」
膝立ちになったサーシャは、股を大きく広げ、ショーツを太腿の半ばまで下ろすと、左手で乳房を、右手を股間にあてがい、くねくねと腰を前後し始めた。さながら騎乗位で楽しむ女のようだ。
「うふふ……素直な娘ね。さぁ、みなも早くしなさい。ここにいるのは王太子以外みんな女なのだから遠慮は無用よ。さぁ、あなたたちの正体をさらけ出しなさい」
グロリアーナのさらなるひと押しで、雪崩現象が起こった。

王太子妃の座を狙うライバル。それもかなりの美人が率先して、先陣を切ったことで、他の姫君たちもつきつぎと女の恥じらいをかなぐり捨てていく。

男装の麗人コーネリアを筆頭に、深窓の令嬢、高飛車娘などなど、十人もの姫君たちが、おのおのスカートをたくしあげて、ショーツを脱ぎ、オナニーを始めたのだ。

（えぇぇ!?　ほ、ほんとにオナニー始めちゃったよ……）

みんな、国許では蝶よ花よと育てられ、多くの男たちの憧れであり、高嶺の花であろう姫君たちがうち揃い、一人の少年を囲んで自涜しているのだ。

集団心理の恐ろしさというものだろうか。姫君たちは競いあい、より淫らに見せようと努力をし、演技をすることによって性感が異様に高まっているようだ。

「あ……はぁ、あぁ……あぁん……」

クチュ……クチュクチュ……。

十重奏で奏でられる女たちの喘ぎ声と淫水のせせらぎ。そして、圧倒的な淫姿が月下に浮き上がる。

女王さまの膝枕で仰向けになっているフィリックスが呆然としていると、シャクティが鈴を鳴らしたように笑う。

「しっかし、女の執念ってすごいわね。ここがあの娘たちの淫ら汁で湖に沈まなければいいけど」

この事態を招き寄せた黒幕である女は、さりげなく先陣を切った女にアイコンタクトを

取っている。サーシャはこの状況を作り出すためのサクラであったのだ。
蠱惑的な肢体をくねらせる美姫たちの視線が、一点に集中している。
女王に膝枕されて仰向けになっている王太子の股間。そこではズボンがはちきれそうなほどにテントを張っているのだ。
それと悟ったときフィリックスの背筋に、ゾクリッという悪寒が走った。
(こ、このまま、こうしていたら、なんかとんでもないことになりそうだ……)
貞操の危機というよりも、生命の危機を感じたフィリックスは、反射的に逃げようとした。しかし、その判断は遅かったらしく、膝枕をしてくれているグロリアーナの両手で、両肩を無理やり押さえつけられる。
「もう、落ち着きがない坊やね。せっかくみんなが恥を忍んで馳走してくれているのよ。楽しみなさい」
「い、いや、しかしですね……」
必死に抵抗する義理の息子をもてあまして、グロリアーナは頬を膨らませる。
「もう……わがままなんだから……マガリ、あなた少しここに座りなさい」
「え、そこ……って、お、王子さまの顔ですが……」
フィリックスの手がついたとはいえ、まだまだ純情なところのあるマガリが、動揺の表情を浮かべる。
「そうよ♪　坊やの顔をあなたのおま○こで押さえてあげなさい」

「わ、わかりました……」
グロリアーナにあたりまえだという顔で促されたマガリは、王太子の顔面に座るという行為の恐れ多さにぎくしゃくしながらも、素直に膝枕されているフィリックスの顔を跨ごうとした。
「ちょっ、ちょっとマガリっ！」
動転した声をあげたフィリックスは止めようとしたが、真っ赤な顔をしたマガリは、エプロンドレスの短いスカートの中に手をやりながら懇願した。
「フィリックスくんが姫様たちを見て興奮しているのを見るのは辛いです」
つまり、好きな男の子が姫君とはいえ、他の女相手に欲情しているくらいならば、自分の陰部を押しつけることによって、自分に興奮しているのだ、と思いたい、ということだろうか。
そのいじらしいまでの女心を悟ったフィリックスは、とっさに逃げることができずに硬直してしまった。
その間にピンクのスキャンティを脱いだマガリが、フィリックスの顔面に座ってしまう。
「うっぷ……」
お饅頭のようにふっくらと膨らんだ大陰唇が、フィリックスの目鼻を覆った。
「あっ、フィリックスくん重くないですか？」
「う、うん……大丈夫……マガリのおま〇こやわらかいし……」

恥じらいつつ質問してくるマガリに、盛りマンの心地よい肌触りを顔面で楽しんだフィリックスはくぐもった声で答えた。
牡としての本能だろう。思わず鼻をクンックンッと鳴らして、美少女メイドの陰唇の匂いを堪能してしまう。
(あぁ、甘酸っぱくていい匂いだ。……あれ、この匂いって、いつものマガリのおま〇この匂いと違うような。あっそっか、グロリアーナさまのおま〇この匂いも混じっているんだ)
考えてみれば、フィリックスは顔面に十代の女の股間、後頭部に三十代の女の股間がある。言わば女の股間にサンドイッチにされてしまったのだ。
さらに言えば、周囲には自涜をしているお姫様の集団がいる。
(あぁ……女性の甘酸っぱいおま〇この匂いで頭がくらくらする)
牝の発情臭のもとを思いっきり嗅ぎ、舐めしゃぶりたいという牡の本能に支配されたフィリックスは、周囲のすべての女性の陰唇に吸いつきたくなった。しかし、それも叶わないので、代替行為として目の前にある陰唇に思いっきりしゃぶりつく。
「あぁぁ！　……そんな……いきなり……強すぎますぅっ♪」
マガリの嬌声を聞いた周囲のオナニー姫たちの肩がビクリと震えた。
自分も舐められたいと思った、あるいは舐められた感覚を想像したのだろう。
「うふふ……オマ〇コ舐めてもらっているんだ。いいわね」

優しく微笑んだグロリアーナは、目の前に座るマガリのエプロンドレスの胸元をはだけさせ、剥き出しになった肉まんおっぱいを手に取る。
「まわりをよく見てごらんなさい。こんなに坊やにおま〇こ舐めてもらいたい女たちがいっぱいいる中で、あなただけが舐めてもらえているのよ」
「ひぃ、は、はい……ですぅ……はぅはぅ……うう……」
愛する少年の顔に跨がり、敬愛する女王に胸を揉まれたマガリはとろんとした顔になる。
やんごとない姫君たちの嫉妬に狂った視線が全身に突き刺さった侍女は、優越感と被虐的な快感が駆けめぐり、亀裂からの分泌は常以上によかった。
（マガリの愛液ってば濃厚で美味しいんだけど、液量が多くて粘着力も強いから、飲んでいると喉が渇いちゃうんだよな）
興奮に我を忘れたフィリックスは、ただただ夢中になって目の前の女唇を舐めしゃぶった。しかし、女王の暴虐はそれだけでは終わらない。さらに左右に控えていた王太子の側近たちにも声をかける。
「ウルスラ、シャクティ。あなたたちも気取ってないでこっちにきて一緒に楽しみなさい。親睦を深めるには一緒にエッチを楽しむのが一番いいんだから♪」
いきなり話を振られたウルスラとシャクティは思わず目を見張った。しかし、女王の言い分にも一理あると認めたのだろう。
「了解した……」

「まぁ、こういうパーティーは参加しないほうが馬鹿ですよねぇ♪」
ごくまじめに答えたウルスラと、楽しげに笑ったシャクティが、身支度を始めたようだ。
ガシャガシャン……と金属的な音をたてたのがウルスラ。シャンシャン……と涼やかな鈴の音を奏でたのが、シャクティであろう。
「まぁ、なんとお綺麗な。さすがは王太子殿下がお見初めになった方々、知性と気品が感じられ、まるで月下の女神さまのよう……」
自涜する姫君たちの羨望と嫉妬の声が泡のように弾ける。
自分が愛する女たちを称賛されるのは、悪い気はしない。フィリックスが月下に映えるというウルスラとシャクティの裸身を想像しながら、マガリの肉裂の中に入れた舌の回転をあげた。
「はぅん〜〜〜♪」
王子様の顔面を跨ぐという不敬中の侍女は大きく仰け反る。
その間に何者か。おそらくシャクティかウルスラの手によってフィリックスのズボンが脱がされた。
ブルンッと唸りをあげて立ちあがった逸物は、臍につかんばかりに反り返っている。
「まぁ……いつ見てもなんとご立派……」
年相応の逸物だと思うが、処女姫たちにはどうしても威圧感があったらしく、畏怖するような溜め息をつく。同時に男性器を見たことで興奮も高まったようで、クチュクチュと

いう卑猥な水音もいっそう大きくなった。
姫君たちの視線が突き刺さっていることを感じる逸物が、すっと冷たい手で捕らえられた。
そして、左半身からふわりっと温かい身体がまとわりつき、同時に右半身にもむっちりとした温かい身体がまとわりついてくる。右の乳房のほうが明らかに重量感に優れた。
(あ、暖かい……左がシャクティで、右がウル姉だな……)
視界が塞がれているフィリックスだが、触感だけで判断できた。
ウルスラとシャクティ、どちらも美人という意味では人後に落ちないが、肉つきのよさという意味なら、ウルスラに軍配があがる。
亀頭部の鈴口を、熱くてぬらぬらとした粘体物が這いまわってきた。
「あっ！　……舐めた……？」
周囲の姫君たちの驚きの声を聞き、フィリックスは事態を悟る。
どうやら、ウルスラとシャクティの二人は、仰向けに寝そべるフィリックスとは反対向きに腹ばいとなり、逸物を手に取り、フェラチオをしてくれているようだ。
(こ、この舐め方はウル姉じゃないな……。ウル姉が咥えてくれるときって、もっと亀頭全体に舌を這わせながら、ジュルジュルッって啜ってくるもんな。それじゃシャクティ……だよな、シャクティってばこういう舐め方するんだ……)
チュパチュパ……チュッチュ……。

亀頭部だけを集中的に舐めまわす、口戯が終わった。ついでパクリッと温かく濡れた空間に、根本まで咥えられた。
（あ、これ絶対、ウル姉だ）
ジュルジュルジュルジュル……。
肉幹そのものを味わうかのように、頭を激しく上下させながら、啜りあげる豪快なフェラチオをしているウルスラの顔が目に浮かぶようだ。
そして、再び亀頭にある男の弱点だけを狙い撃ちにするフェラチオが始まった。
（くぅ～……ただおちんちんをしゃぶるだけなのに、女性の個性って出るもんなんだなぁ）
質実剛健のウルスラと軽妙洒脱のシャクティ。一見、水と油に思える二人が、交互にしゃぶってくれるのだ。
その幸福感に酔いしれたフィリックスの肉袋の中で、睾丸が二つキュウッと吊り上がった。そして、逸物がトックントクンッと脈打ち始める。
（あう……ウル姉とシャクティって仲よくできるか心配だったけど、それなら安心だ。あ、もう出そう。射精しても二人仲よく飲んでくれるかな……くぅ）
なかなか傲慢なことを考えてしまっているフィリックスの耳に、再びグロリアーナの声が聞こえてきた。
「うふふ……食い入るように見つめちゃって……あなたたちも参加したいの？」
「あ……はい……ぜひ……」

自らの指で盛り上がるお姫様たちは、意中の王子様の痴態をまえに、恥も外聞もなく領いた。
「だめよ。あなたたちはそのまま見ていなさい」
「そ、そんな……ご無体な……」
慈悲を乞う姫君たちに、女王は艶然と微笑む。
「うふふ……坊やのおちんちんをしゃぶれるのは、坊やに愛されている女だけなのよ。ウルスラ、シャクティ、この発情している牝豚たちにしっかり見せつけてあげなさい」
女王の命令に、王太子の側近二人は領いたようである。
ペロ……ピチャピチャピャ……。
ジュルジュルルル……ジュル……チュ……。
二人は肉幹をシコシコと扱きあげながら、交互に舐めるフェラと、吸うフェラを繰り返す。
(あう、この激しい吸いつき。やっぱり二人で競いあっているよな……)
ウルスラも、シャクティも嫉妬とは無縁そうな女たちだが、こうやって共同作業になると、対抗意識が芽生えてしまうようだ。
二人とも相当に大胆な奉仕をしているようで、見守るオナニー姫たちも、すっかり圧倒されてしまって、食い入るように見つめているのがわかる。
単に二人の美女の口戯を受けているだけではなく、十人もの姫君たちの熱すぎる視線が、

逸物に突き刺さり、それが男を否応なく高ぶらせた。
（で、でも、こんなに注目されていながら、呆気なくイったらみっともないよな）
男としての見栄を張ったフィリックスは、高ぶってくる射精欲求を必死になって我慢した。気を散らす意味もあって、ますます激しく陰唇を舐めしゃぶってしまう。
「ふぁん♪　フィリックスくんのお口ぃ～、ひぃん……気持ちよすぎます。し、舌が、舌がクリちゃんを弾くぅ～」
マガリは自覚していなかったろうが、彼女がどこかを責められているなどと告白すれば、周囲のオナニー姫たちの指も同じところを責めてしまう。
まるでマガリの受けている愛撫を、同時に体験しているかのように、姫君たちも喘いでいた。
フィリックスはマガリの陰唇を舐めているだけなのに、周囲の姫君たちの陰唇も舐めているような錯覚に陥る。たまらず舌使いはますます激しくなった。
「ひぃはぁ……はぁ……、はぁん……もうイきそうですぅ……」
マガリの切羽詰まった声に、姫君たちも盛り上がり、さらにはウルスラとシャクティの奉仕も激しいものになる。
チュウチュウ……ジュルジュル……グチュクヂュ……。
さまざまな卑猥な水音が混じりあい、世界は混沌としていく。
まるで女体の湖に溺れているかのような錯覚に陥ったフィリックスの男根はピクピクと

痙攣し、睾丸から溢れ出した熱い液体が先っぽまで詰まり、溢れ出す。
ウルスラとシャクティは競いあうように、先走りの液を啜り、それを見た姫君たちは生唾を飲む。
そして、最初に限界に達したのは、王太子に顔面騎乗をし、女王に乳房を揉みしだかれていた娘である。
「も、もう……イク、イ、いっちゃう、いっちゃい、まーすぅぅぅぅぅぅぅっ!!!」
プシャッッ！
あたり憚らぬ絶叫とともに熱い愛液のシャワーを顔面に受けたフィリックスは、愛しい側近二人に扱きあげられていた逸物を弾けさせた。
「うっくあああっ！」
ドパュッ、ドバドビュルルルルルゥゥゥゥ――――ッ!!!
断末魔の呻きとともに、フィリックスは盛大に射精した。
牝の匂いに包まれていた休憩場に、牡の濃い匂いが混じる。

※

「はぁ……はぁ……はぁ……」
あたりには熱い喘声のみが響いている。
フィリックスの吐きだした精液は、ウルスラとシャクティが仲よく処理してくれたようだ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/